

血液透析患者へのエンド・オブ・ライフケア

～リフレクションの有用性～

キーワード: 血液透析患者, エンド・オブ・ライフケア, リフレクション, 倫理

○甲木 楓 (透析室)

I. はじめに

近年、血液透析患者の高齢化が進み、認知症をはじめとするさまざまな疾患を合併した患者が多くなっている。これからの人生をどう生きるかを考え、患者の価値観に合わせた生活を支援していくために患者の意向を早期より確認していく必要がある。先行研究にて『腎疾患患者のエンド・オブ・ライフの特徴は「患者・家族、医療スタッフが、死を意識したころから始まる」とされ、「患者が慢性腎臓病でいずれ透析が必要だ」と言われた時期からだ』¹⁾と述べられている。血液透析を受ける患者はエンド・オブ・ライフケアの対象であるが、エンド・オブ・ライフに関する看護介入は倫理的配慮が必要である。そこで、患者の全身状態が安定しており、導入時より信頼関係を構築してきた維持透析期にあたる透析患者を対象とした介入に興味をもった。介入の方法として、リフレクションを活用することで患者の言葉から思考過程や価値観を明らかにすることが可能であると考え、エンド・オブ・ライフケアにおけるリフレクションの有用性を検討することとした。

II. 研究目的

当院に外来通院中の血液透析患者1名を対象に患者へリフレクションの機会を設け、エンド・オブ・ライフケアにおけるリフレクションの有用性を検討する。

III. 用語の定義

1. 透析患者

ここでは血液透析患者のみを示す

2. エンド・オブ・ライフケア

診断名、健康状態、年齢に関わらず、差し迫った死、あるいはいつか来る死について考える人が、生が終わるときまで最善の生を生きることができるよう支援すること

3. 維持透析患者

社会適応期を示す

透析導入後1年から3年間

血液透析導入後、生命危機に陥ることなく安定した透析療法を受けている時期

4. リフレクション

ここでは内省・振り返りを指す

IV. 方法

1. 対象者 (以下、Y氏)

当院外来維持透析通院中の患者。腎硬化症にて2018年に血液透析を導入後、生命を脅かす大きなトラブルはなく、趣味を続けながら通院できている。姉も透析患者であった。血液透析導入時は透析に対しマイナスイメージを抱えていた。

研究者が透析導入時より受け持ち看護師として担当している。合併症への不安や検査データ逸脱時など、患者に寄り添いながら疑問点についてはその都度解決するように介入してきた。それにより信頼関係が構築できている。

以前エンド・オブ・ライフに関して説明をした際に「終活と聞くと考えるのが怖い、不安になる」と話していたことがある。

2. データ収集の方法

腎友会が作成しているエンディングノートや腎臓病SDM推進協会が作成したパンフレット・ACP人生会議のパンフレットを活用したインタビューガイドを作成する。インタビューガイドを用いて、半構成的面接法を用いた20分程度のインタビューを2回実施する。

3. 分析の方法

インタビュー内容から逐語録を作成し患者の身体面や精神面、価値観について比較しやすいように、臨床倫理4分割シートを用いて内容の整理を行う。患者への2度のリフレクションを経て心理的变化やエンド・オブ・ライフに関する意思、Y氏の大切にしていることに対する意見を記載し、患者にリフレクションを実施したことで得られた情報からリフレクションの看護介入としての有用性

を他の研究から裏付けしていく。

4. 倫理的配慮

今回の研究において発言した内容が患者の事前指示書に反映されないこと、研究内容に不安や苦痛がある場合は拒否・中止が可能であることを書面にて説明する。当院の倫理審査委員会にて承認を得たのちに患者本人へ説明・同意を得た。

V. 結果

作成した逐語録から臨床倫理4分割シートを用いてY氏の言葉の整理を行った。1回目のリフレクションにて得られた結果を表1に示す。2回目のリフレクションにて得られた結果を表2に示す。

1. 1回目のリフレクションで得られた結果

導入時からの振り返りを行い身体的に安定している現状についてY氏の語りがあり、透析を生活の一部として捉えているという発言があった。身体的には安定していることがわかり気持ちの変化について問いかけを行った。Y氏の姉は25年間透析をしていた。亡くなる前日まで透析を続けていたこと、最期はみんなで見送れたことや多くの病気を合併しながら最期まで透析を続けていたこともありY氏の死生観に影響を与えている。Y氏は自分と姉を重ね、不安を抱えることもあったと語っていた。また、「もうしょうがないか」と受け入れていると話し、受け入れができて背景やY氏が「仕方ない」という感情の中でも楽しみを見つけて生活している患者の思考過程に関して振り返り、性格の前向きさや、不安なことを周りに表出し解消できていることにY氏自身が、気付くことができた。

Y氏は、「延命はしない」と断言していたがY氏の考える延命についてY氏の大切にしていることに関する質問をし、振り返りを行った。透析については延命として捉えておらず治療の一貫として今後も継続していくものだろうという意見の表出があった。一方で月1回参加している手芸教室や夫・家族・友人との外出・食事を楽しみにしている。話すこと・食べることが好きで大切にしている。そのため、胃瘻造設などの延命処置は希望しないという発言に至っていた。

2. 2回目のリフレクションで得られた結果

姉や友人が長い病気の経過を辿っていることもあり、Y氏も透析を導入してからのさまざまな合併症のリスクを懸念していると話していた。不安の解消について問うと、その都度医療者に質問し不安の解消ができていた。また、現在は身体的な不自由はなく生活できているため、今のうちに旅行や食事に出かけるようにしている。

透析になるまではまだ導入したくないという気持ちが強くあった。どうやって透析を受け入れたのか振り返ると、尿毒症症状が出現し、倦怠感を実感したエピソードがありその時の身体的苦痛を振り返ると現在でも透析の必要性を再認識し、導入してよかったと前向きに受け止めることができていた。

2018年の8月に報道された非終末期における透析見合わせの件を受けて、Y氏も“終活”と聞くと不安になると訴えていた。また、まわりの透析患者も“終活”というワードに敏感になっていた。医療者より具体的なエンド・オブ・ライフケアに関する説明を実施しY氏も医療者の言葉を素直に受け入れていた。今回改めて振り返ってみると、他者の意見は他者の意見として考えエンド・オブ・ライフについて自身の意見を周りに伝える必要性をY氏も感じている。また、報道を受けてもY氏自身は、当院の医師や看護師に対し信頼があり、不安はないと語っている。医療者への安心感から不安の表出や疑問をすぐに具現化できていることがわかった。

表1・2から、Y氏の身体的状況は変化しておらず、価値観や意向に変化はなかった。しかし、リフレクションにてY氏の具体的な心情や問題解決への前向きな考え方、自身の意見を素直に他者へ表出することが問題解決の糸口へ繋がっていることにY氏自身も気付くことができた。

VI. 考察

インタビュー実施前、Y氏はエンド・オブ・ライフケアに関して「延命はしないと漠然と考えている。」と話していた。しかし、今回Y氏が大切にしていることについて、導入期からの経験を一緒に振り返り、Y氏にとって透析の位置づけや延命とはどんな行為であるかを具体的に表出することが可能となった。Y氏が話すことや食べることが大切にしているからこそ胃瘻造設などの延命は希望せず、現在夫や友人と旅行や食事会を楽しむことができ

ている。改めて、Y氏の意向や価値観を確認できたといえる。また、現在Y氏は透析導入後1年半が経過している。維持透析開始後の安定期は、自らの看取りの時期のあり方を考える好機の一つと考えられている。²⁾透析のある生活がリズム化し、身体的・心理的負担が少ない時期を選定したこともリフレクションが有用となった一因として考えられる。

エンド・オブ・ライフと定義すると患者は何を話せばいいのか困惑してしまうことがY氏の発言からも考えられる。しかし、これまでの経過や経験を振り返り、自身の行動の意味や思考過程を振り返ることで、患者は自身の価値観に気づき、これからどう生きるか考えを深めることができるといえる。患者が日ごろから自分の意思を表出できるような信頼関係を築くこと、そして、その関係のなかでケアを行うこと³⁾が必要と述べられており、信頼関係が形成された中でのリフレクションであることが患者の意思表出を促す上で有用であるといえる。

今回はリフレクションを実施した間隔が1ヶ月未満であったため、身体的変化や心理的变化はなく2度のリフレクションにて大きな意見の変化はなかった。しかし、リフレクションを行うことは思いや考え、感情や情動の内面での意味づけが期待される。定期的なリフレクションの実施や入院や環境の変化等のイベントが起きた際に介入することで心理変化の有無や患者の価値観を捉える契機となることが期待できると考える。

VII. 結論

今回の研究において、リフレクションは患者の思いの整理ができ、自身の価値観に気づきをもたらすことからエンド・オブ・ライフケアにおいて有用であった。

今回の研究では2度のリフレクションでの心理的变化の有無はなかったが介入を続けていくことで患者の価値観をより的確に捉えることが可能となると考えられる。

VIII. 本研究の限界と課題

本研究は対象患者1名に対して実践した看護介入から得られた結果である。エンド・オブ・ライフケアにおけるリフレクションの有用性を言い切ることはできない。今後あらゆる対象に対してエンド・オブ・ライフケアの

介入の際にリフレクションを活用することで有用性を検討していく必要がある。

IX. おわりに

週3回必ず医療者と顔を合わせている透析患者であってもエンド・オブ・ライフに関する意思を表出することは難しくRussも「多くの患者は、透析を将来あきらめるということを考えていたり話したりすることを望まない。その時が来たら意を決しますという気持ちでいる」と述べている。⁴⁾今回の研究を経て、オープンフロアで特殊な治療を受ける患者に対し、思いをゆっくり傾聴する時間を確保することは難しく、患者の考えやこれまでの生活背景に関しても知らないことが多い現実を痛感した。医療者と接する機会の多い透析患者であるからこそリフレクションを行う機会を用意し患者の思いを捉え続けていくことは可能である。

今回エンド・オブ・ライフケアにおけるリフレクションの有用性を検討したことで、より透析患者に対する早期からのエンド・オブ・ライフケアへの介入に繋がることを期待したい。

引用文献

- 1) 水内恵子：透析患者のEnd-of-life期と看護 透析会誌 46(3) 362-363
- 2) 大平整爾：透析の非導入・継続中止・事前指示—いつ、どのようにして進めるべきか—臨牀透析 30(10)97
- 3) 阿部利恵：事前指示書の作成と活用 透析ケア 20(11) 28
- 4) Russ, A. j. and Kaufman, S. R. : Discernment rather than decision-making among elderly dialysis patients. Semin. Dial. :25 31-32

参考文献

厚生労働省作成 これからの治療・ケアに関する話し合い～アドバンス・ケア・プランニング～ (パンフレット)
腎友会作成 わたしの手帖
腎臓病SDM推進協会 <http://www.ckdsdm.jp> 腎臓病あなたに合った治療法を選ぶために

表 1

<p>医学的適応(恩恵・無害性)</p> <p>体調はこの頃落ち着いている</p> <p>体がもう(透析のある)生活になれているのかな</p> <p>友達ももう介護とかしているから(送迎付きの透析病院を)決めてたんです。でも歩けるうちはね。</p>	<p>患者の意向(自立性尊重)</p> <p>透析はもうこれしかしょうがないかって受け入れてます。</p> <p>私はあんまり(透析に)行きたくないとかってないんです。</p> <p>私は透析は延命とは考えていない</p> <p>私の延命って言うのは食べられなくなったときに胃ろうとか。</p> <p>わたしはあんまり先のことも考えていなかったし、ま、透析はずっとして、歩けなくなったらそういうところでがんばってなるべくそうね、どうなるんだろうかね。</p>
<p>QOL(幸運追及)</p> <p>今度土曜日に終わったら友達と会うとかちょっとした楽しみを考えながら過ごしてます。</p> <p>主人もやっぱり今のうちに旅行とか近くで1泊とかしかできないけど行ける時友達と行こうって。</p> <p>食べる事、話せる事が1番大事。</p> <p>ほとんどおしゃべりして帰るんですけどね、それがもうすごい楽しみです。大事にしながらね。</p>	<p>周囲の状況(効用と公正)</p> <p>姉が最期やっぱパーキンソンとかになったから。ちょっと気にはなりますね。25.6年はしてたかな。</p> <p>主人とふたりだから。主人も軽いけど脳梗塞しているからやっぱりちょっと心配。</p> <p>その時その時に息子たちも大丈夫？とかお嫁さんも気にかけてくれてる</p> <p>私が先に亡くなれば主人しか残らないし、ほとんどもううちは息子1人だから、子供の負担になる、あれしか、でしょう。金銭的にわたし一人だったら年金が少なくなるでしょう。</p>

表 2

<p>医学的適応(恩恵・無害性)</p> <p>合併症とかがね、どこででるかなって。</p> <p>(透析導入時は)友達のところに行って食事をしたときに申し訳なくて食べて気分悪くなってふわふわふわふわして。だから！と思って。(導入の決意)</p> <p>姉が透析始めて会った時に顔がもう、黒くって、姉じゃないみたいで。それを先生に言ったら薬もね、やっぱり20年前とは違うから。そこまではないよって。</p>	<p>患者の意向(自立性尊重)</p> <p>子供が元気でっていうのが一番。私達はもう、普通に毎日を過ごしていければ。</p> <p>姉とは歳も違ってたし私は70歳代だったし、まあ、これだけでもってよかったかなって思っ。若いとつらいなっていうのはあるけど、自分にはちょうどいいかなって。</p> <p>わたしはやっぱりそのひとりひとり環境も・考え方も違うって思うから。一応うちはもうお嫁さんにも伝えて、延命はしないっていうのははっきり伝えてます。最期の最期だね。意識がないときはもう延命はやめようねって。主人とね。話し合う事が大事かなって。</p>
<p>QOL(幸運追及)</p> <p>わたしもほら、主人と70いくつだから。いまももう1年に1、2回とか旅行に行くんですよ。ちょっとでも体が元気なうちにそういうことしとこうっていう、まあ、いつ動けなくなったりとか、まあ条件として動けてもそういうできないとかわからないとかねでてくるかもわからないから。今はそういうことをしていこうっていうね。機会があれば行こうねって。</p>	<p>周囲の状況(効用と公正)</p> <p>孫も正月くらいしか。ね。しょっちゅうそんなにあえてはないからね。</p> <p>やっぱり終活っていうとね、自分はがんばろうってしているのにそういう話をするのはっていうのがみんなあつたみたいだけど。そんな風じゃなくて(透析見合わせのニュースを受けて)事件はわかんないけど。主人にも話したけど、日赤はそんなこと絶対ないって。先生も優しいし看護師さんもみんなほんとに。絶対こんなこと悪くならないようにもっていつてくれるんじゃないかなって。私は思ってます。</p> <p>延命はやめようねって主人とね。そう遠くない未来だからね。</p>